

マッターホルン(4,478m)山頂は、スイスとイタリアの国境になっている。アルプスの高峰は、18世紀に次々に登頂されているが、最後に残ったのが、このマッターホルンだった。これは単に技術的に困難というだけでなく、この山は魔物が住む山と恐れられていたからからとされている。初登頂は 1865 年、エドワード・ウィンパーが率いるイギリス隊で、ガイド 2 名と隊員 4 名によってなされたが、下山中に 4 人が死亡する事故があり、悲劇の初登頂として知られている。

ド・ソーシュール著「アルプスの旅」で、「ノミで彫り刻まれたかのように、鋭い岩の三角形のオベリスクとなってそそり立っているモン・セルバン(マッターホルンをフランスとスイスでの呼び名)の高く、誇らしい頂である」とマッターホルンを表現している。しかも、他の山々から守られているでもなく、孤高で直立するもっとも山らしい山の姿をしている。

この山を仰ぎ見ながら、スイスとイタリア側から氷河、氷床を滑る機会に恵まれた。アルプスの真っ只中に身をおいてみると、山々の絶対的な大きさと自然の美しさに、人間は小さな存在に過ぎなかった。

<グレンツ氷河を滑る・スイス> 2002/3

今日も気持ちよく晴れた。目の前にはモンテ・チェルビノ、マッターホルンのイタリア名、が朝の明るい陽光を浴びて聳えていた。今日は、アルプス第 2 の高峰、モンテ・ローザの一角からの滑降である。メンバーは、ガイド、コーディネーターとわれわれ日本山岳会アルパインスキークラブ 6 名の計 8 名である。

女性パイロットのヘリコプターは、風を避けるためか崩れかけた蒼氷のへばり付く岩壁すれすれのスリリングな飛行コースをとり、4530m のプラトー・ジクナルクッペ(アルプス最高所、4556m に建つマルガリータ小屋の前)に降りた。幸い、頭のふらつきなどの高山病的な症状はなかった。

バラ色の山を意味するモンテ・ローザは、イタリアとスイスの国境に横たわる幾つかのピークをもつ山群である。当初、登頂後の滑降を予定していたが、時間的に無理ということで、直ぐにスキーを履いた。足元のグレンツ氷河を挟んでリスカム、その彼方にマッターホルンなど個性豊かな百嶺千山が連なっていた。その美しすぎる光景は、逆に自然の恐ろしささえ感じてしまうほどであった。ガイドが「今日のマッターホルンがパイプをふかしている」とポツリと呟いた。地元では、山頂から東に向かって雲が湧くのは好天の兆しの言伝えがあるという。

グレンツ氷河の滑り出しは、標高が高いだけに雪質は申し分なかった。天高くそそり立つマッターホルンに向かって滑り出した。見た目には一面雪に見えるが、クレパス帯にさしかかると、ガイ

ドからトレースから外れないようにと指示がとんだ。3750m のゴルナ氷河合流点で、スキーを履いたまま一息入れた。氷河上では、クレパスが何処に隠れているか解らない。少しでも危険回避の手段がツボ足にならないことだという。スキーと登山の兼用靴とはいっても、足首が前傾しておりリラックス状態には程遠く、弾んだ息を整えるだけの休息である。氷河の合流は、河川の水のようにすんなりとはいかない。不気味な蒼氷の氷塊が重なり、押し合いながら押し出されている。そして、これが圧倒的な規模で不安定に覆いかぶさっている。見ているだけで押し潰されそうな迫力である。

2 度目の休みは、2700m の高台に建つモンテ・ローザ小屋下で、平坦に近い氷河上だった。スキーで丸く踏み固めたところでスキーを脱ぎ、ゆっくり昼食をとった。

掘り所がないほど広がった氷河が急に喉のように狭まり、高さ 3~4m の氷の迷路に入った。氷河の上を流れる水路であり、所々に小さなムーン、氷河上にできたマンホールのような竪穴がある。不規則に右折、左折を繰り返して進んだ。差し込む陽光を不規則に反射させ明るく、異次元の世界であった。その直ぐ下方は一転した。明るく差し込んでいた陽光を遮る深いゴルジュ(峡谷)で、氷河の末端だった。ストックを放り投げ、スキーを履いたまま固定されたロープに掘りながら抜け出した。一段と温もりを増した陽光を浴びながらマッターホルン裾野の街、ツェルマットのスキー場に滑り込み、グレンツ氷河滑降の祝杯を挙げた。今日の飛行時間は 14~15 分、料金が 1 人 16,000 円、標高差 2700m、距離 30 km の滑降が楽しめた。旅先での出費としては痛い。でも、アルコールを受付けない自分にとっては、飲兵衛の飲み代に比べれば、決して許されない贅沢ではない。

スイスのツェルマットからイタリアに行くため、2 本のロープウェイを乗り継ぎ、賈マッターホルン、クライネ・マッターホルン(3886m)に上がり、スキーコース内外の深雪を拾いながらチェルビニアに滑り降りた。標高差 1880m、距離 20 km。合計すると、標高差 4580m、滑走距離 50 km と、日本では考えられない数値になった。今日は、イタリアからスイスに遊びに行き、午後イタリアに戻った。勿論、パスポートなどの提示は一切ない。

<オートルートを滑る・イタリア> 2003/3~4

オートルートの歴史は 150 年前まで遡る。フランスのシャモニーからスイスのツェルマットまでの 120 km のアルプス横断高所路で、フランス山岳会により踏破された。その後、スキーの発展とともに山岳スキールートとして人気を呼ぶようになった。正式には、幾つかのルートがあるが、いずれも氷河を登り、横切り、3000m 級のコル(峠)を幾つも越え、山々を登り、山小屋に泊まりながら移動する。

山スキーをする時は、岩登りをする場合と同じハーネス、ザイルに固定するための安全ベルトを常時締め、カラビナ、アルミ製の輪を提げる。アルプスなど氷河を滑る時は、クレパスと雪崩の

危険が付きまとう。クレパスで厄介なのは、雪を被って隠れている場合である。ガイドは、クレパスのある場所を良く知っている。これがガイドを雇う大きな理由でもある。ハーネスは、急斜面での登り降りでの確保用、万が一クレパスに落ちた時、ハーネスのカラビナにザイルをとおして引っ張り揚げるときに使う。

雪崩の危険である。特に、寒さの厳しい時に起きる表層雪崩である。万が一雪崩に巻き込まれた時のことを考え、ビーコン、電波探知機を体に括り付けている。常時、発信状態にしている。誰かが埋まったら受信状態に切り替えて捜索する。感度は100mあり、方向と距離を音で知らせる。従って、ビーコン、プローブ(積雪調査や雪崩で埋没した人を探す棒)、スコップは、雪崩レスキューの三種の神器で常に携行して行動する。他に、雪崩の危険のあるところを滑る時は、ストックの手皮に手を通さない、ザックの腰ベルトを締めない、スキーの流れ止めを外すなど、雪崩に引き込まれないために考えられることをしながら滑っている。

日本山岳会のアルパインスキークラブの有志で、3 から 4 月にかけてヴァノアーズ山群からヴァリア・アルプスの「アルプス山岳スキー縦走」を計画した。縦走といっても、設備の整ったアルプスでは、ケーブル、ロープウェイそしてスキーリフトをフルに利用した後に稜線まで登り、スキーで山小屋に下って宿泊の繰り返しである。

今回は、アルベールビルから入山したが、フェーン現象による積雪不足や悪天候によりヴァノアーズ山群を終えた段階で一旦山を降りた。シャモニーで体制を建て直し、車でオーロラに移動し、ヴァリス・アルプスのビニエツト小屋(3200m)に入った。山小屋は小さく見えるが、内部は意外と大きく100人収容だという。背後の数百mの絶壁を利用して、別棟のトイレが建っていた。便器の下は断崖で、散乱した排泄物が見える。思い出したように吹き上げてくる強風は、無防備状態の衣服をばたばたと煽った。

お国柄だろうか、小屋には5種類ものワインが揃っていた。主食はパンだが、これも数種類から選べた。スープに始まり、スパゲティ、シチュー、デザートチーズまで、文句なしに美味だった。食事の間、フランス語、ドイツ語、英語、日本語が飛び交った。

今日は、ツェルマツを目指しての滑降だが、その前に3500m級のコル(峠)を3つ越えなければならない。5時、ヘッドランプの灯りを頼りに出発した。二つ目のコルがスイスとイタリアの国境、モンブルーレのコルである。傾斜がきつくなった後半は、スキーを担ぎつぽ足で登る。幸い、雪が適度に締まっていたので難なく登りきった。

最後はバルベリーヌのコルで、今度はイタリアからスイスに入る。国境が無人の陸続きで、全く意識することのない国境越えであった。息を弾ませ、よいっしょの掛け声で登りきると、三角錐のmatterホルン(4478m)とダンデラン(4171m)の姿があった。コル(峠)のもつ別世界への入口、期待感を彷彿させるところだった。見上げる北壁の迫力に圧倒される。名峰の岩と氷に飾られた威厳に満ちた山に言葉を失う。犯し難い静寂の中で、神秘的ですらあった。ここに居るのは私

たちだけだった。未明の小屋を出て 6 時間を要していた。カメラのファインダー越しにマッターホルン北壁のアングルを探したが、人間もスキーの跡も入らない自然のままが最上であった。

しばらくして、持ち前の朗らかさを取り戻した。これからはマッターホルンの西面を見ながらの滑降である。ツムート谷は、遥かツェルマットまで続いている。崩れそうなセラック(氷柱)の下やデブリ(雪崩落ちた雪塊)の中を駆け抜け、15時、10時間の行動を終えた。(2003/6,2013/7加筆)